令和 8 年 11 月 10 日
気象庁　大気海洋部

エルニーニョ監視速報　（No. 410）

2026 年 10 月の実況と 2026 年 11 月～2027 年 5 月の見通し

- **10 月のエルニーニョ監視海域の海面水温の基準値からの差は +4.4°C で、1949 年以降で最も高かった 2026 年 9 月の値を超え（表、図 11 参照）、2026 年春から続いているエルニーニョ現象は、過去最大の強さを更新した。**
- **今後、エルニーニョ現象は冬の前半までに最盛期を迎えたのち、2027 年春にかけて続く見込み（100 %）。**

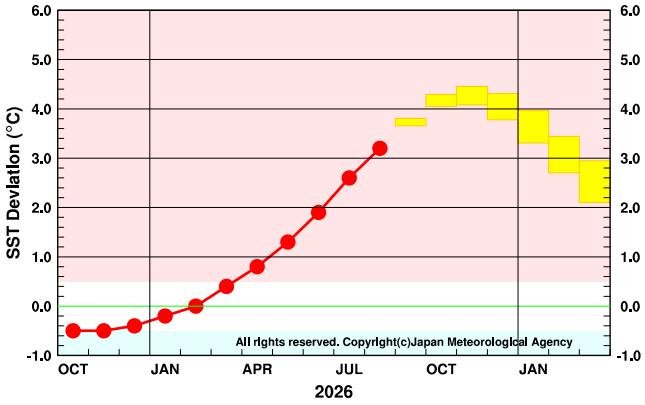


図 1　エルニーニョ監視海域の監視指数（海面水温の基準値との差）の 5 か月移動平均値の経過と予測
赤い折れ線グラフはエルニーニョ監視海域の監視指数（観測値）の 5 か月移動平均値の経過、黄色のボックスは大気海洋結合モデルによる監視指数の予測結果（70%の確率で入ると予想される範囲）を示す。ピンクの部分は監視指数の 5 か月移動平均値が +0.5°C 以上、水色の部分は −0.5°C 以下の範囲を示す。

監視指数は、エルニーニョ監視海域（北緯 5 度-南緯 5 度、西経 150 度-90 度）で平均した海面水温について、各月の値と基準値（その年の前年までの 30 年間の各月の平均値）の差を取ったもの。
気象庁では、監視指数の 5 か月移動平均値がピンク（+0.5 ℃以上）／水色（-0.5 ℃以下）の範囲に入っている状態で 6 か月以上持続した場合に、エルニーニョ／ラニーニャ現象の発生としている。

（予測期間:2026 年 9 月～2027 年 3 月）

年	月	平均期間	各月の確率
2026 年	9 月	2026 年　7 月　～ 2026 年　11 月	100
	10 月	2026 年　8 月　～ 2026 年　12 月	100
	11 月	**2026 年　9 月　～2027 年　1 月**	100
	12 月	**2026 年10 月 ～2027 年　2 月**	100
2027 年	**1 月**	**2026 年11 月 ～2027 年　3 月**	100
	2 月	**2026 年12 月 ～2027 年　4 月**	100
	3 月	**2027 年　1 月　～2027 年　5 月**	100

高い　平常　低い

図 2　各月のエルニーニョ監視海域の監視指数（海面水温の基準値との差）の 5 か月移動平均値が各カテゴリー（高い／平常／低い）に入る確率（%）
エルニーニョ監視海域の監視指数（海面水温の基準値との差）の 5 か月移動平均値が高い（+0.5°C 以上）／平常（−0.4°C ～ +0.4°C）／低い（−0.5°C 以下）の範囲に入る確率を、それぞれ赤／黄／青の横棒の長さで月ごとに示す。

図の見方の詳細については、「図表の見方」（https://www.data.jma.go.jp/cpd/elnino/mikata/mikata3.html）をご参照ください。

【解説】

エルニーニョ／ラニーニャ現象

- **10 月の実況:2026 年春から続いているエルニーニョ現象は、過去最大の強さを更新した。** 10 月のエルニーニョ監視海域の海面水温の基準値からの差は +4.4°C で、1949 年以降、通年で最も高かった 2026 年 9 月の +4.0°C を超え、過去最大の強さを更新した（図 3、図 11、表）。エルニーニョ／ラニーニャ現象発生の判断に使用している 5 か月移動平均値の 8 月の値は +3.2°C で 5 か月連続で基準値を超えた（図 1、表）。太平洋赤道域の海面水温は、中部と東部では平年より顕著に高く、西部では平年より低かった（図 4、図 6）。太平洋赤道域の海洋表層の水温も、中部と東部では平年より顕著に高く、西部では平年より低かった（図 5、図 7）。対流活動は、太平洋赤道域の日付変更線付近から東で平年より活発で、中部太平洋赤道域の大気下層の東風（貿易風）は平年よりかなり弱かった（図 8、図 9、図 10）。このような大気と海洋の状態により、2026 年春から続いているとみられるエルニーニョ現象は更に発達しており、過去最大の強さを更新し続けている。
- **今後の見通し: 今後、エルニーニョ現象は冬の前半までに最盛期を迎えたのち、2027 年春にかけて続く見込み（100 %）。** 大気海洋結合モデルは、実況に見られる太平洋赤道域の中部から東部の海洋表層の顕著な暖水が、大気と海洋の相互作用により冬の前半にかけて維持されて、エルニーニョ現象の発達のピークを迎えると予測している。その後は、2027 年春にかけて、暖水は次第に弱まるため、エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値からの差は小さくなるものの、基準値を上回る値で推移すると予測している（図 11）。以上のことから、今後、エルニーニョ現象は冬の前半までに最盛期を迎えたのち、2027 年春にかけて続く見込み（100 %）。

西太平洋熱帯域及びインド洋熱帯域の状況

- **西太平洋熱帯域:** 10 月の西太平洋熱帯域の海面水温は、基準値より低い値だった（図 3）。今後、2027 年春にかけて基準値より低い値で推移すると予測される（図 12）。
- **インド洋熱帯域:** 10 月のインド洋熱帯域（IOBW）の海面水温は、基準値より高い値だった（図 3）。今後、2027 年春にかけて基準値より高い値で推移すると予測される（図 13）。10 月のインド洋ダイポールモード（IOD）指数は +0.69 で、海面水温は西部を中心に高くなった（図 3、図 4）。

10 月の日本と世界の天候への影響

- **日本:** エルニーニョ現象時の特徴は明瞭に見られなかった。今後の日本の天候については、最新の季節予報を参照されたい。
- **世界:** フィリピン南部〜ジャワ島、インドシナ半島北部〜インド洋、南米北部〜中部太平洋熱帯域、ブラジル東部、オーストラリア南東部の高温、ポリネシア南部の低温、ブラジル南部及びその周辺の多雨、南アジア、南米北部及びその周辺、ポリネシア南西部〜東南アジア南部の少雨がエルニーニョ現象時の特徴に一致していた。

主文におけるエルニーニョ／ラニーニャ現象の発生確率と見通しの表現

* 主文におけるエルニーニョ／ラニーニャ現象の発生確率は、図 2 の各月の確率を基に、エルニーニョ監視海域の監視指数の 5 か月移動平均値が +0.5°C 以上／ −0.5°C 以下の状態が 6 か月以上持続する可能性を総合的に評価したもの。
主文における表現は、この発生確率を基に季節単位で下表の表現を用いて記述するが、状況により異なる表現を用いることもある。

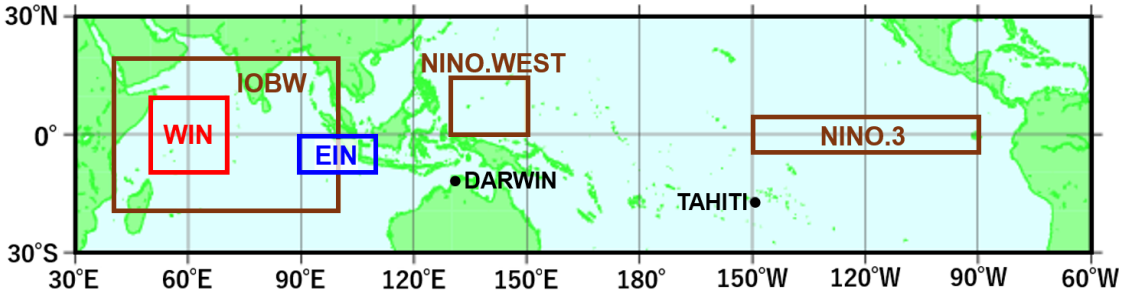
	発生確率			主文における表現（発生確率は例）
	エルニーニョ現象	平常	ラニーニャ現象	
エルニーニョ現象の発生（持続）	50 %以上	30 %以下		エルニーニョ現象が発生する（続く）可能性が高い（50 %）。
	60 %	40 %	0 %	平常の状態が続く（になる）可能性もある（40 %）が、
	50 %	40 %	10 %	エルニーニョ現象が発生する（続く）可能性の方がより高い（60 %）。
	50 %	50 %	0 %	エルニーニョ現象が発生する（続く）可能性と
	40 %	40 %	20 %	平常の状態が続く（になる）可能性が同程度である（50 %）。
	40 %	50 %	10 %	エルニーニョ現象が発生する（続く）可能性もある（40 %）が、
	40 %	60 %	0 %	平常の状態が続く（になる）可能性の方がより高い（60 %）。
ラニーニャ現象の発生（持続）		30 %以下	50 %以上	ラニーニャ現象が発生する（続く）可能性が高い（50 %）。
	0 %	40 %	60 %	平常の状態が続く（になる）可能性もある（40 %）が、
	10 %	40 %	50 %	ラニーニャ現象が発生する（続く）可能性の方がより高い（60 %）。
	0 %	50 %	50 %	ラニーニャ現象が発生する（続く）可能性と
	20 %	40 %	40 %	平常の状態が続く（になる）可能性が同程度である（50 %）。
	10 %	50 %	40 %	ラニーニャ現象が発生する（続く）可能性もある（40 %）が、
	0 %	60 %	40 %	平常の状態が続く（になる）可能性の方がより高い（60 %）。
平常の状態への移行（持続）	30 %以下	50 %以上	30 %以下	平常の状態になる（が続く）可能性が高い（50 %）。

【監視・予測資料】

2026 年 10 月における赤道域の海洋と大気の状況

1. エルニーニョ監視指数（図 3、表）

エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差は +4.4°C で過去最大の強さを更新



エルニーニョ現象等監視海域とインド洋ダイポールモード指数を計算する際に使用する海域（上図）

NINO.3: エルニーニョ監視海域　NINO.WEST: 西太平洋熱帯域　IOBW: インド洋熱帯域　WIN, EIN: IOD 監視海域

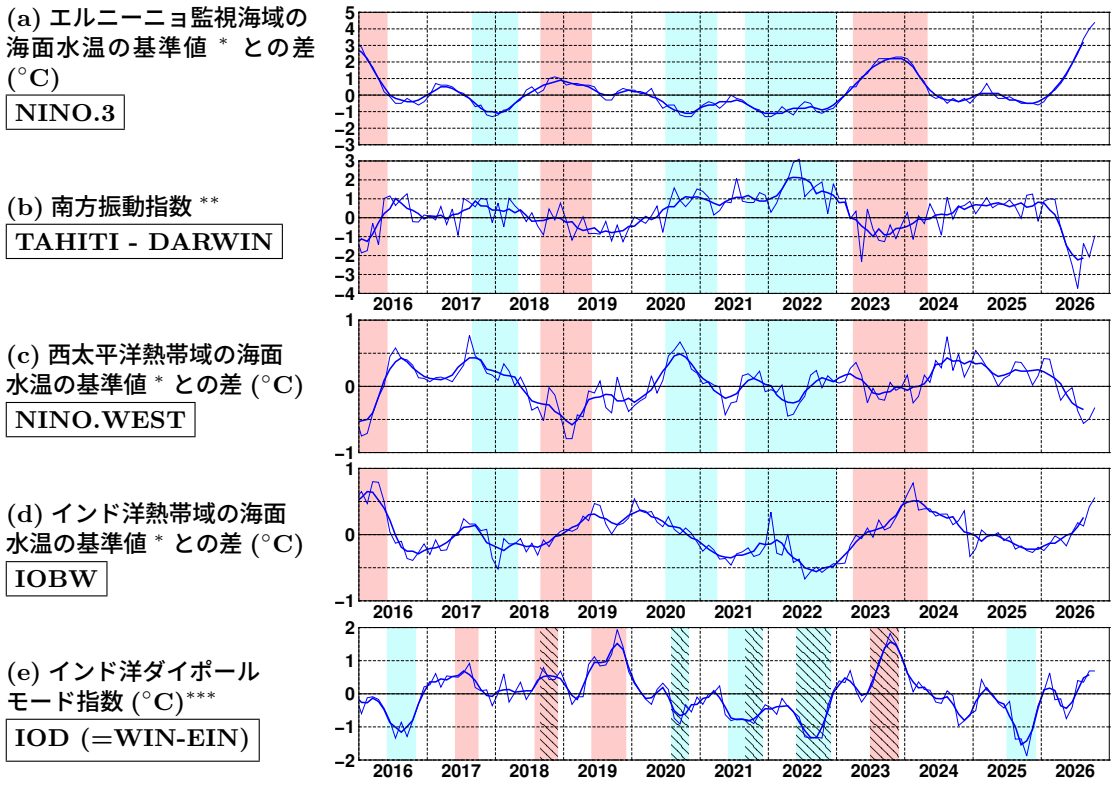


図 3　各監視指数の最近 10 年間の経過

折線は月平均値、滑らかな太線は (a)～(d) は 5 か月移動平均値、(e) は 3 か月移動平均値を示す。(a)～(d) の赤色の部分はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の部分はラニーニャ現象の発生期間を示している。(e) のインド洋ダイポールモード (IOD) 現象の指数の赤色の部分は正の IOD 現象の発生期間を、青色の部分は負の IOD 現象の発生期間を示し、エルニーニョ現象（ラニーニャ現象）と同時に発生していた正（負）の IOD 現象の発生期間には、赤色（青色）の部分に加えてハッチを施している。

気象庁では、インド洋ダイポールモード指数の 3 か月移動平均値が 6～11 月の間で 3 か月以上続けて+0.4 ℃以上（-0.4 ℃以下）となった場合に、正（負）のインド洋ダイポールモード現象の発生としている。

＊ 基準値は、その年の前年までの 30 年間の各月の平均値 （(c) 西太平洋熱帯域、(d) インド洋熱帯域では、30 年間の変化傾向による上昇分を加えている）。

＊＊ 南方振動指数はタヒチとダーウィン（TAHITI と DARWIN; 上図に位置を示した）の地上気圧の差を指数化したもので、貿易風の強さの目安の 1 つであり、正（負）の値は貿易風が強い（弱い）ことを表している。指数の算出に用いた気圧の平年値は 1991～2020 年の 30 年平均値。

＊＊＊ インド洋ダイポールモード指数は WIN（西極）と EIN（東極）の差で計算される。インド洋ダイポールモード指数の計算方法の詳細は令和 4 年度季節予報研修テキストを参照。

表 エルニーニョ監視海域の海面水温と南方振動指数の最近 1 年間の値

5 か月移動平均値の下線部は +0.5°C 以上となった月を、斜字体は −0.5°C 以下となった月を示す。
海面水温と南方振動指数の最新月は速報値である。

	2025 年		2026 年									
	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月
月平均海面水温（°C ）	24.5	24.5	25.2	26.5	27.5	28.3	28.4	28.5	28.4	28.6	28.9	29.4
基準値との差（°C ）	−0.5	−0.6	−0.4	+0.1	+0.3	+0.7	+1.2	+1.9	+2.5	+3.4	+4.0	+4.4
5 か月移動平均（°C ）	*-0.5*	−0.4	−0.2	0.0	+0.4	+0.8	+1.3	+1.9	+2.6	+3.2		
南方振動指数	+1.3	−0.2	+0.9	+1.0	+1.0	−0.6	−1.5	−2.5	−3.7	−1.4	−2.1	−0.9

2. 海洋（図 4〜図 7）

太平洋赤道域の海面水温は、中部と東部では平年より顕著に高く、西部では平年より低かった

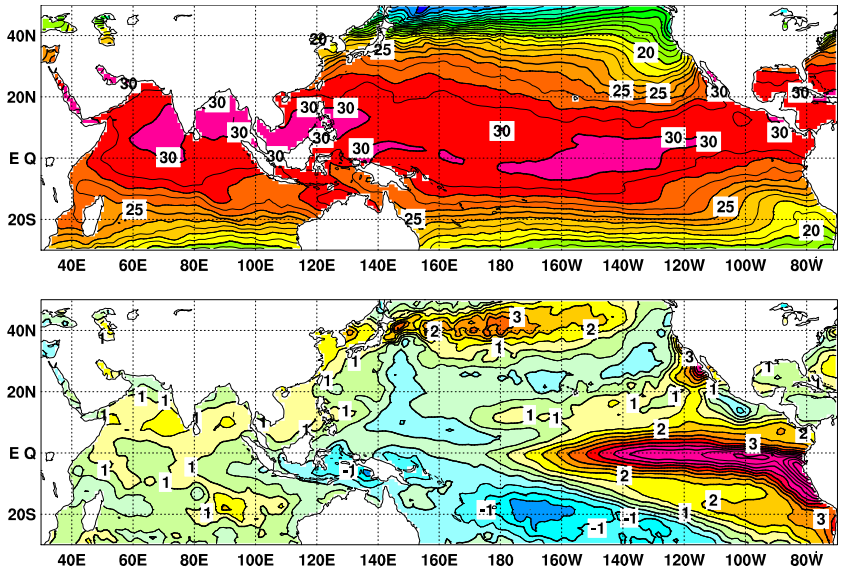


図 4 2026 年 10 月の海面水温図（上）及び平年偏差図（下）

海面水温図の太線は 5°C 毎、細線は 1°C 毎の、平年偏差図の太線は 1°C 毎、細線は 0.5°C 毎の等値線を示す（平年値は 1991〜2020 年の 30 年平均値）。

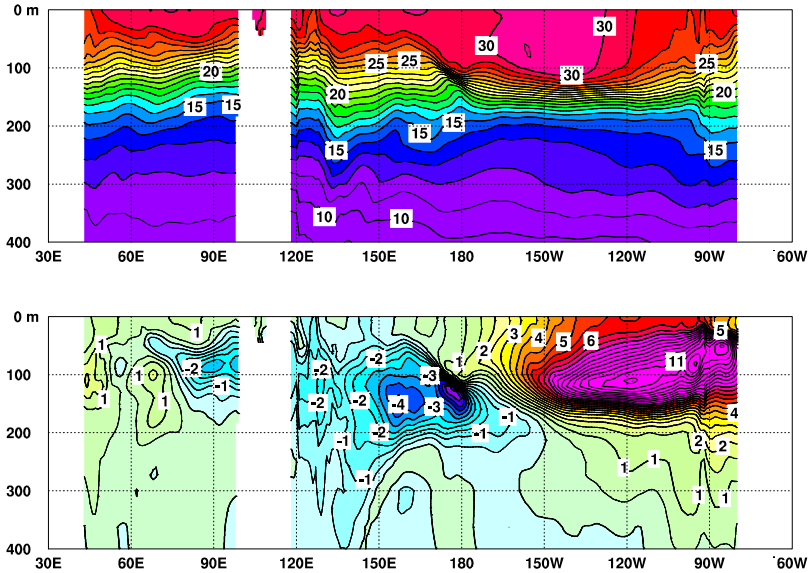


図 5 2026 年 10 月のインド洋から太平洋の赤道に沿った水温（上）及び平年偏差（下）の断面図

上図は太線が 5°C 毎、細線が 1°C 毎の等値線を示し、下図は太線が 1°C、細線が 0.5°C 毎の等値線を示す（平年値は 1991〜2020 年の 30 年平均値）。図中白く抜けている部分は陸地である。

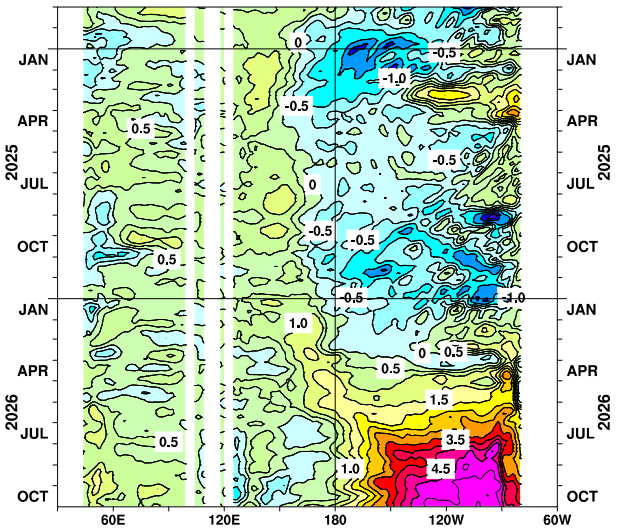


図 6 インド洋から太平洋の赤道に沿った海面水温平年偏差の経度–時間断面図

太線は 1°C 毎、細線は 0.5°C 毎の等値線を示す（平年値は 1991～2020 年の 30 年平均値）。図中白く抜けている部分は陸地である。

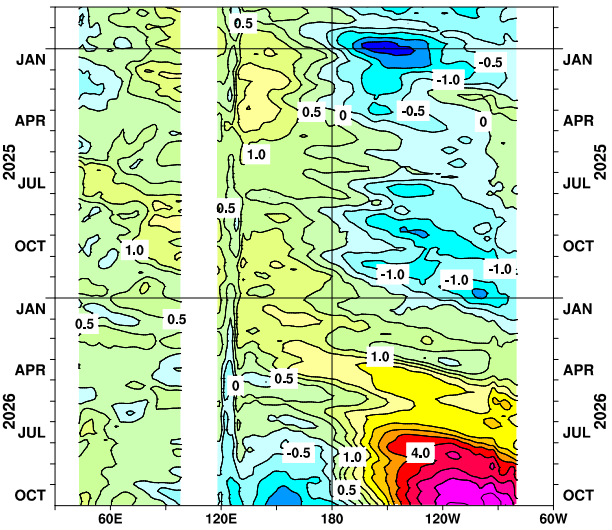


図 7 インド洋から太平洋の赤道に沿った海面から深度 300m までの平均水温平年偏差の経度–時間断面図

太線は 1°C 毎、細線は 0.5°C 毎の等値線を示す（平年値は 1991～2020 年の 30 年平均値）。図中白く抜けている部分は陸地である。

3. 大気（図 8～図 10）

太平洋赤道域の日付変更線付近の対流活動は平年より活発で、中部太平洋赤道域の大気下層の東風（貿易風）は平年よりかなり弱い

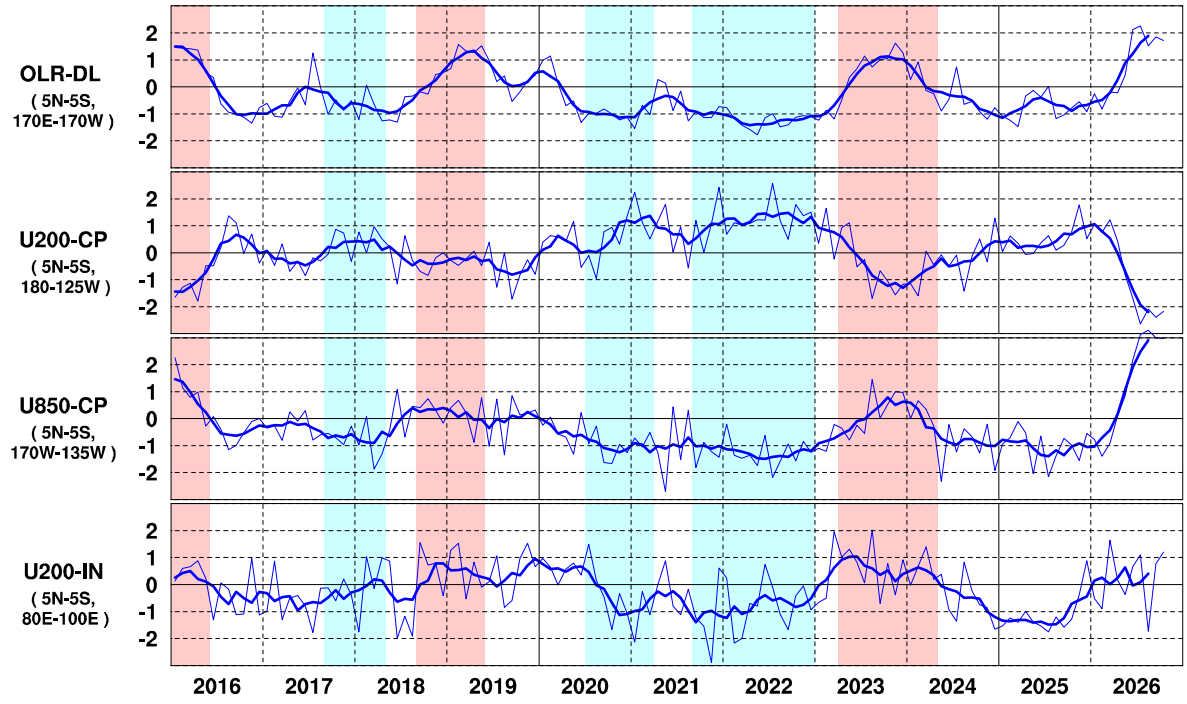


図 8 日付変更線付近の OLR 指数（OLR–DL）、 対流圏上層（200hPa）の赤道東西風指数（U200–CP）、対流圏下層（850hPa）の赤道東西風指数（U850–CP）、インド洋における対流圏上層 (200hPa) の赤道東西風指数 (U200–IN) の時系列（上から順に）

折線は月平均値、滑らかな太線は 5 か月移動平均値を示す（平年値は 1991～2020 年の 30 年平均値）。赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。OLR データは米国海洋大気庁 (NOAA) から提供されたものである。令和 5 年 10 月 11 日発表のエルニーニョ監視速報（No.373）より新しいデータに切り替えた。

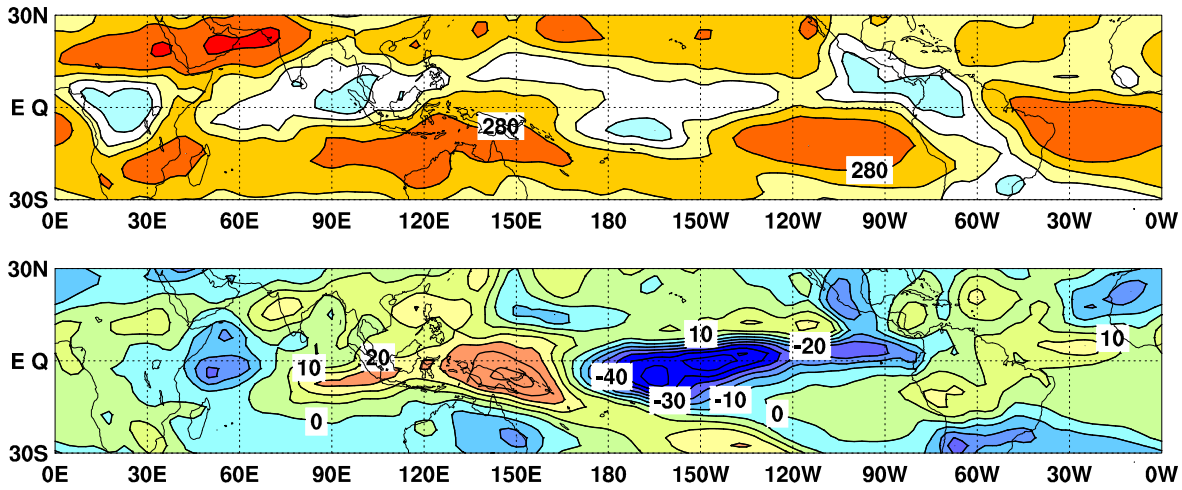


図 9 外向き長波放射量 (OLR)（上）及び平年偏差（下）の分布図 (2026 年 10 月)

OLR の値が小さいほど、対流活動が活発であることを示しており、上図では 220W/m^2 以下の領域に青の陰影を施している。下図では OLR が平年値より小さく、対流活動が活発な領域に青の陰影を、OLR が平年値より大きく、対流活動が不活発な領域に緑～黄～赤の陰影を施している（平年値は 1991～2020 年の 30 年平均値）。上図は 20W/m^2 毎、下図は 10W/m^2 毎に等値線を描いている。OLR データは米国海洋大気庁（NOAA）から提供されたものである。令和 5 年 10 月 11 日発表のエルニーニョ監視速報（No.373）より新しいデータに切り替えた。

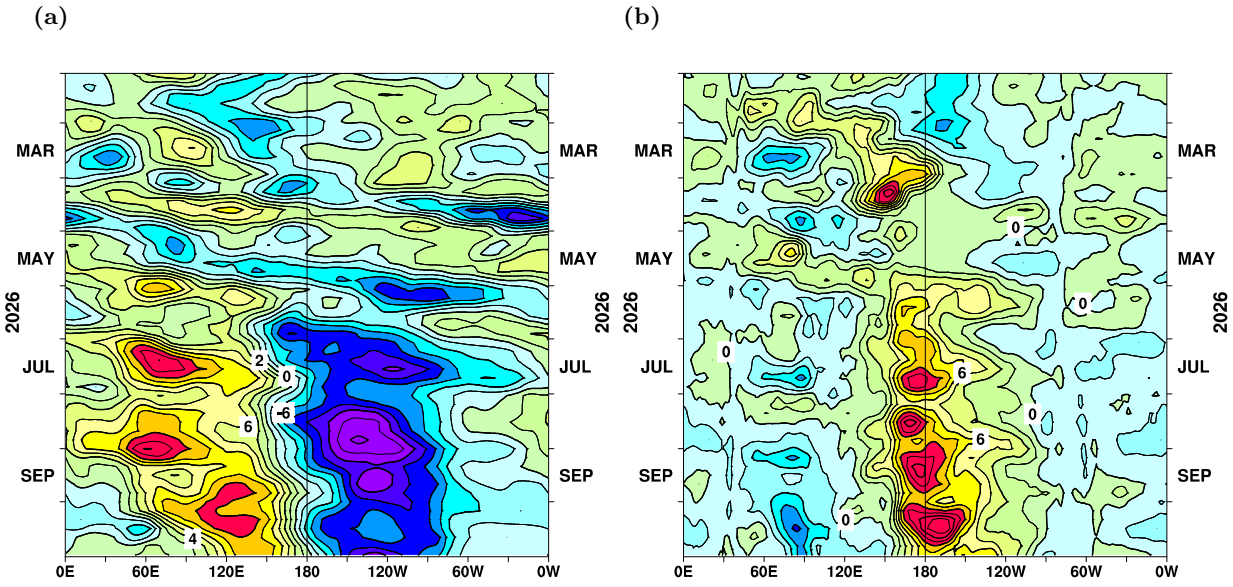


図 10 赤道付近における対流圏上層（200hPa）の速度ポテンシャルの平年偏差（a）及び対流圏下層（850hPa）の東西風速の平年偏差（b）の経度–時間断面図

(a) 等値線の間隔は 2×10^{6}m^2/s で、平年よりも発散が強く、対流活動が活発な領域に青の陰影を、平年よりも発散が弱く、対流活動が不活発な領域に緑～黄～赤の陰影を施している。(b) 等値線の間隔は 1.5m/s で、西風偏差の領域には緑～黄～赤の陰影を、東風偏差の領域には青の陰影を施している（両者の平年値は 1991～2020 年の 30 年平均値）。

2026 年 11 月～2027 年 5 月の海面水温予測 (大気海洋結合モデルによる)

エルニーニョ監視海域の海面水温は、冬の前半にかけて基準値より顕著に高い値で推移し最盛期を迎えたのち、春にかけて基準値を上回る値で推移する予測

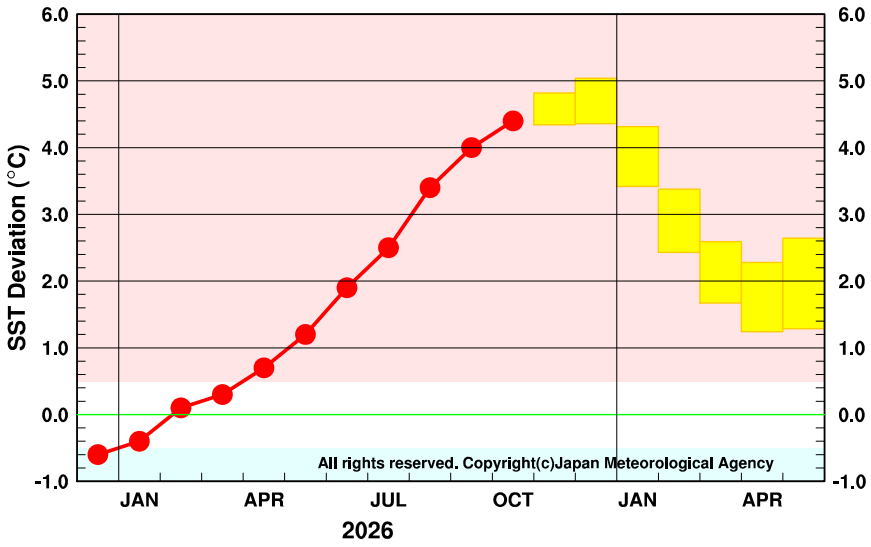


図 11 エルニーニョ監視海域の月平均海面水温の基準値との差の先月までの経過（折れ線グラフ）と大気海洋結合モデルから得られた今後の予測（ボックス）
各月のボックスは、海面水温の基準値との差が 70%の確率で入る範囲を示す。

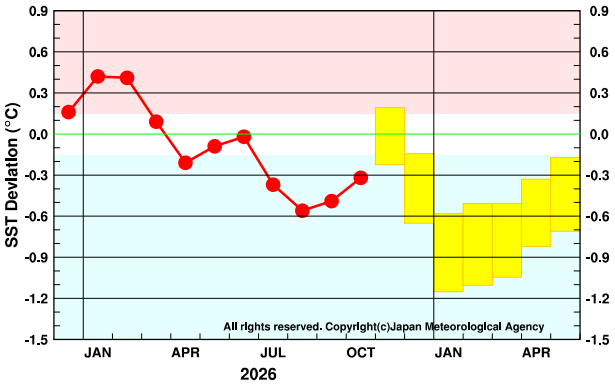


図 12 西太平洋熱帯域の月平均海面水温の基準値との差の先月までの経過（折れ線グラフ）と大気海洋結合モデルから得られた今後の予測（ボックス）
各月のボックスは、海面水温の基準値との差が 70%の確率で入る範囲を示す。

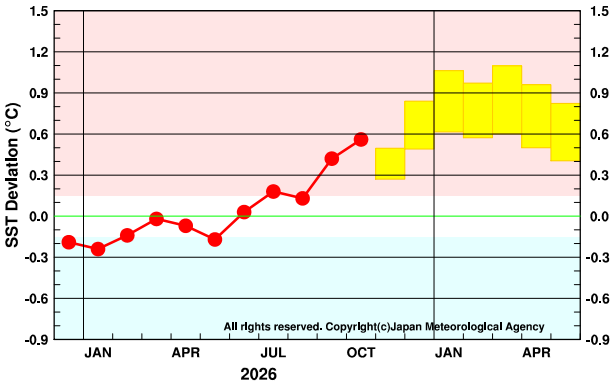


図 13 インド洋熱帯域の月平均海面水温の基準値との差の先月までの経過（折れ線グラフ）と大気海洋結合モデルから得られた今後の予測（ボックス）
各月のボックスは、海面水温の基準値との差が 70%の確率で入る範囲を示す。

エルニーニョ現象などの情報は気象庁ホームページでもご覧になれます。

(https://www.data.jma.go.jp/cpd/elnino/)

来月の発表は、12 月 10 日 14 時の予定です。
内容に関する問合せ先：気候情報課
（電話 03-6758-3900 内線 4546）